

若者と支援者をつなぐ広報誌

YOUTH SERVICE

若者を考える、若者と考える

vol.29



特集

若者 X 創り出す

TOPICS

地域が若者にもたらした影響
若者が地域にもたらした影響

YOUTH SERVICE vol.29

2017年12月1日発行

Catch Your Dream 夢をかなえる学校がある!

—普通科目とコース専門科目(希望者のみ)の履修で高校卒業資格を取得

選べる4つの登校スタイル Schooling Style

- クラス制** たくさんの友達と接しながら学ぶ。
 - フレックス制** 自分で登校する時間帯を選ぶ。大学感覚で学ぶ。
 - 土曜日選択制** 指定の土曜日に登校。少人数の塾感覚で学ぶ。
 - 夏冬集中受講制** 夏休みと冬休みなどに集中して授業出席して学ぶ。
- ※それぞれの登校スタイルは途中変更が可術です。



選べる16の専門コース Special Course

- 進学
 - 調理・製菓
 - 声優
 - IT
 - 理容師・美容師 (国家資格取得)
 - 芸術
 - 芸能
 - 心理・教育
 - コミック・アニメーション
 - ダンス
 - 美容
 - ミュージック
 - スポーツ
 - 外国語
 - 保育
- 地域実践 平成30年開講
※希望者のみ選択できます。※専門コースは毎年変更できます。
※卒業単位に20単位まで認定できます。



平成29年新校舎のぞみ館完成

不登校相談支援センター なごみ教室

学校生活や人間関係等で不安感や緊張感が高まり不登校に陥む保護者や生徒を対象に、いきいきとした生活を送ることができるように、総勢9名のカウンセラーが支援します。

平成27年4月京都府認可

私たちは青少年育成を応援しています!



通信制・単位制・普通科

京都つくば開成高等学校

転入学や編入学は、随時受付します。 <http://tkaisei-kyoto.jp/> 京都つくば

〒600-8320 京都市下京区西洞院通七条上る根本町406番
TEL:075-371-0020 FAX:075-371-0021

◆JR・近鉄・地下鉄丸太線「京都駅」より北西へ徒歩8分 ◆京阪「七条駅」より西へ徒歩16分



ぷち・メッセージ

伏見青少年活動センター
運営協力会委員 藤崎 壮滋



伏見桃山でまちづくり会社「ぴあぴあコミュニティサポート合同会社」、およびまちづくりNPO「伏見寺田屋浜 Piers'n'Peers」の代表として、地域を支える一翼を担おうと努力しています。日常的に地域の商店街振興やイベントの運営、出版物の制作などを行うなかで心掛けているのは、地域人材の発掘と育成です。例えば音楽や演劇が得意な人には路上パフォーマンスを、イラストが得意な人には地域マップのデザインを、調整役が得意な人にはイベントのコーディネート役をという具合。その中には高校生や大学生もいますが、一緒に活動する中で目を輝かせて率先して動いてくれるときは嬉しいですね。振り返ってみると、そういう時は私たちも目を輝かせて動いている。充実感、満足感というのは伝わるのだと思います。

イラスト：中田千景

特集
若者×創り出す

高校生が作ったページ

高校生のおサイフ事情

若者の参加とユースワーク

水野篤夫

TOPICS

地域が若者にもたらした影響
若者が地域にもたらした影響

ユースかわら版

「カンボジアスタディツアー2017」

「シェアハウス×まちづくり

NPO法人 聚楽第(じゅらくだい)

ほか

ユースサービスの理念

子どもから責任ある大人へと成長する青少年を支援しています。家庭、学校、地域社会、職場ほか、青少年が自主的な活動場面への参加を通じて、社会と交わり、自身の興味や関心を豊かにし、必要に応じて、助言、情報、または多様な人的・物的資源が得られるような機会を提供します。

**第一学院独自のプラスサイクル指導で
自分を好きになる、
未来が変わる!**

中3、転・編入のご相談を
随時受け付けております。
お気軽にお電話ください。

自分に合ったスクールライフ

通学型 ●毎日通って高校生活を満喫
●週1~3日マイペースに登校

通信型 - Mobile HighSchool -
●時間や場所を選ばず学ぶ

仲間ができる!笑顔が増える!

心強い仲間たち
(ピアサポーター)

様々なサークル・
イベント

進路決定へのこだわり

- 大学進学者 583名
- 専門学校等進学者 622名
- 就職者 360名

(平成29年 進路実績)

ICT教育の推進

iPad・miniを生徒全員に配布

学習意欲の向上 学力の定着

iPadはApple Inc.の登録商標です。

自分に合った学習

- 中学校の復習から大学受験対策まで
- 進路対策も万全(進学・就職)
- 「セルフケア講座」で社会に出て役立つストレス対策

進路定着・自立サポート

- キャリアサポートセンター
- チームD1 (卒業生ネットワーク)

生徒第一...だから

第一学院高等学校

高卒認定合格を目指すコース(通学・通信)もあります。

通信制高校(広域通信・単位制) 京都市営地下鉄「五条」駅①番出口徒歩2分(京都駅より1駅)

〒600-8418 京都府京都市下京区烏丸通松原下ル五条烏丸町407-2 烏丸KT第2ビル5F

京都キャンパス TEL 075-371-3007 全国52キャンパス (平成28年7月時点)

www.daiichigakuin.ed.jp 第一学院高校 検索

若者×創り出す

つくるとは？「創り出す」とは？

「つくる」という言葉を聞いたとき、どんなイメージを持つでしょう。辞書には「つくる」という言葉は次のように掲載されています。

—ある力を働かせて、新しい物事・状態を生み出す。まとまった形のあるものにする。(出典：デジタル大辞泉 小学館) —

そして、漢字にしてみると、「作る」「造る」「創る」と3つの漢字で表記され、また「創作」「創造」「造作」と合わさった単語もあります。普段何気なく使っている「つくる」という言葉は、どんな物・手法、さらには何を生み出すのかによって、使い方が変わります。そのうえ、老若男女、障がいの有無に限らず、誰もが気軽に楽しめる行動であるように思います。

「つくる」のひとつに、創作活動があります。例えば、絵画や陶芸、木工および音楽やダンス、演劇など多様に存在します。実際に、そういった活動に携わる若者を多く見かけます。中高生の部活動や大学のサークル、社会人になってからも活動を続けている人、芸術関連の大学や専門学校に通い、新しい作品を生み出している人など、いろいろな場所で、多様な表現する楽しさや面白さを感じています。

そんなさまざまな創作活動をしている若者を間近で見ていて、創り出されるのは、作品だけではないように見受けられます。今回の特集では、若者が創り出すまでの過程や発表したときに触れる、経験・体験について考えてみたいと思います。

創作活動をしている若者に聞いた「創り出す」とは？

後世に残すためにものを作る
例えば、フンコロガシ（玉を
キレイに作る）はどうなんだ
ろう……

高等
生物

見る側にも見せる側にも魅力
がある
人の創造の産物
醜魅醜魅
そのときどきのきっかけで変
わる不確かさがある

うれ
しい

美術がだめだったのが、1個
できたら嬉しかった。
そこから「うれしい」が広がっ
たら嬉しい
「うれしい」がいっぱい

専門学校に行っていること、
将来のことも含めて挑戦
作るとき、やったことがない
ことをすることが多い「創り出
す」というのは挑戦だと思う
何かを創り出すのは難しい

挑戦

アイデアを考えると、
海を泳いでいる気分だから
イメージを巡らせるときは自由

海

自分の発見！
世界の
広がり！

作り始めるという点と生み出
すという点がある
生み出すという点では、自分
の中にあるものを使って作り出す
気づいていないものに気づく

若者一人ひとりの表現を大切にしたい自由な場づくり

東山アートスペース・からだではなそう～表現活動への誘い～

東山青少年活動センターでは、障がいのある青少年の余暇活動へのニーズの高まりを受け、創作表現と身体表現を手法とした事業に10年以上前から取り組み始めました。

そこでは、同世代のボランティアや活動をナビゲートするアーティスト達との交流を通して成長促進の効果も生まれてきました。例えば、アトリエ活動である「東山アートスペース」からは、平面に絵を描いていた若者がこの空間と出会い、次の年には立体での表現に移行したなど、作品を通じて経年的な状態変化が見られます。二次元から三次元への展開として発達の視点からの成長とも考えられます。からだを使った表現活動「からだではなそう」は、多様な表現を保障される空間です。そんな場を通じて、安心して自己表現すること、他者を受け入れる体験を繰り返すことで、自分の気持ちを伝える表現の幅が広がったという声が保護者からも寄せられています。また、市民が参加できる機会も設け、初対面の人たちと同じ空間で活動することで、それぞれのパーソナルスペースが広がる体験にもつながっています。こういった成長をみることができると、

	からだではなそう	東山アートスペース
内容	身体表現活動	創作表現活動
対象	京都市内に在住・在学または通勤先のある知的な障がいのある中学生～30歳までの青少年	
ボランティア	京都市内に在住・在学または通勤先のある高校生年齢～30歳の青少年	
活動日 (年間登録制)	毎月第2・4土曜日	毎月第1・3日曜日

単発で終結しない場づくりを行ってきた成果だと捉えています。活動センターでは参加対象を青少年に限定していますが、対象年齢を越えた場合は保護者たちが中心になって創り出しています。

参加する若者だけでなくナビゲーターやボランティアも活動を通して自身の成長を語ってくれています。それぞれの創造表現を保障する場からは、同時にボランティアの変化も促されるしかけとなっています。



全身使い、表現活動楽しむ

東山知的障害の若者ら交流

京都市内の知的障害のある青少年が表現活動を楽しむ「からだではなそう」のオープンデーが9日、東山区の東山青少年活動センターであった。約20人の参加者が体を動かしながら交流を深めた。同事業は、市と市ユニバーシティ協会の2006年から知的障害者の活動空間をつくる目的で始めた。今回はさらに多くの人に参加を呼び掛けるためにオープンデーを初めて設けた。

テーマは「ステーションのある青少年が表現活動をつくる」と、参加者はステーションに立った空間に立って、観客役が拍手を送った。ペアのダンスもあり、いろんな応援で盛り上げたりして楽しんでいた。

オープンデーは11月25日午後1時半から15時30分まで、参加費も無料。参加費千円。手伝ってくれるボランティアも募集している。申し込みは市東山青少年活動センター0619(541)0619。(仲藤 隆)

2017年9月10日 京都新聞掲載



「創り出す」に参画するボランティア

アトリエ活動の「東山アートスペース」と表現・コミュニケーション活動の「からだではなそう」とでは、それぞれ違った良さもありますが、どちらの活動も結果よりふれあいの過程を大切にしたい自由で柔軟な雰囲気です。その中で動きや言葉、表情などで参加者が「自分」を示してくれると、「伝わった」「つながった」という喜びを感じます。もちろん、一緒に取り組んだことが作品や身体ワークなどの形になるのも嬉しいものです。

一方で、反応がよくわからないとき、どの程度まで働き

かけたらよいのだろうか？ 私の「できた」は参加者にとってもそうなのだろうか？ など、難しさや迷いを感じることもあります。

これらすべてを含めて、取り組みがお互いの充実につながるように考え、ときにその形が見えかけてくる学びと発見の場がそこにはあります。そして、それは場を共有してこそ始まるのだと、私は「一緒にいること」の大切さを実感しました。

(ボランティアスタッフ 大学生20歳 男性)

NPO法人 スウイング

理事長 木ノ戸 昌幸

社会を「主体者」としてデザインする

スウイングでは「障がい者」と「健常者」を分けない。同様に——例えば・制度上は分かたれていても現実としての日々の中では——「利用者」「職員」「被支援者」「支援者」などとも分けることはせず、誰もがNPO (=市民団体)たるスウイングが展開する市民活動の「主体者」であるというスタンスを貫いており、このスタンスがメチャクチャ大事！と感じ続けている。絵や詩の芸術創作活動「オレたちひょうげん族」、地元・上賀茂地域の清掃活動「ゴミコロリ」、様々な子どもたちと交流する「コードモとアソブ」、世界各国からの観光客への

おせっかいボランティア、京都人力交通案内「アナタの行き先、教えます。」等々、スウイングの市民活動は多種多様である。しかしながら全ての活動に通底するのは効率や生産性を第一とした杓子定規な価値観や固定観念を緩め、人が生きることや働くことに新しい視座をもうけ、更新し続けるためのソーシャルデザイン……いやいや、もっと素直に言うならば「この息苦しい世の中をほんのちょっとでもヤワラかくオモシロくしたい！」というシンプルな願いであり、これは障がいの有無なんて軽々と超えた、現代社会に生きるほとんど全ての「主体者」共通の願いなのではないか？ と思ったり、思わなかったりしている次第である。



NPO法人 子どもとアーティストの出会い

プログラムディレクター 川那辺 香乃

私たち、NPO法人子どもとアーティストの出会い(以下、KAD)では、子どもたちの想像力や創造性の向上、多様な社会の創出を目指した事業に取り組んでいます。

京都のお隣、兵庫県内では、全公立中学校2年生を対象にした一週間の「職場体験」を「トライやる・ウィーク」と称し実施しています。TOA株式会社では毎年、「ミュージシャン体験」として神戸市立義務教育学校港島学園の中学生を受け入れ、プロの音楽家との創作活動を実施しています。KADはそのプログラムの企画制作を担当しています。

初日は緊張していた中学生も、次第に音楽家たちと打ち解け、音楽で表現することのおもしろさに目覚めていきます。最終日に同社自社ホール「ジーベックホール」で行われるコンサートでは、中学生がいきいきと舞台に立ち、観客を圧倒する



今回「創り出す」をテーマに、若者の声や京都市を中心に創り出されている空間を取り上げ、若者が創り出すことを通して触れる経験・体験について考えてみました。

若者や運営者の語りを概観してみると、それぞれの空間で作品以外のものも創り出されているように感じました。若者に「創り出すとは？」という問いを投げかけたとき、十人十色の考え方や感じ方があり、そして、自分の世界で完結せず作品を通じて他者と交流していることが聞けました。また、活動の紹介では、作り手や運営者の視点から、さまざまな経験・体験が創り出されていることにも気が付きました。これらの経験・体験は(1)自分を表現する(2)他者に受け入れられる(3)他者を受け入れるという3つに通ずるのではないかと

思います。これらを若者が発揮できると、表現活動以外の空間でも楽しめたり、居心地がよく過ごせたりと豊かに生きていく可能性をもつことができると思います。このことは、特集でいろいろな人が語っているように、ノーマライゼーションの考えとも通ずる部分があるのではないのでしょうか。つまり、「個人が認められ、尊重される」空間での創作活動には、いつの間にか前述の(1)~(3)が自然と行われるということです。そこから既成概念にとらわれない自由な発想で生み出されたものを通して新しい価値観を感じることができます。

それが若者の「創り出す」活動が持つ、魅力ではないでしょうか。



東山アートスペース×からだではなそう©

「創り出す」若者の姿

創り出すとは頭の中で描いているものを表現する方法であり、縛りがなく自由で終わりが無い活動だと思います。頭では思い描けるが表現できない場合もあれば、想像を超えるものが生み出される場合もあります。若者は創り出す過程の葛藤を感じながら、生み出す達成感に魅力を覚え、次はどんなものが生まれるかという期待から新たなものを創り出します。加えて、創り出すこととは一人で完結するのではなく、他者と分かち合うことに若者は魅力を感じています。自分から生まれた表現を通して他者の感性を知ること、また、他者の表現を通して生まれる自分の感性に気づくことで自分の世界の広がりを実感します。

例えば「からだではなそう」や「東山アートスペース」では障がいのあるなしに関わらず共同の空間を楽しむ過程で、バーバル(言語)なコミュニケーションでは上手くいかないことに会います。共に創り出す過程を通して相互にメッセージを送りあい、様々な表現方法をお互いに学びます。「からだではなそう」や「東山アートスペース」が芸術の完成度を求める空間ではなく、若者同士が表現できることを楽しむ空間であることを重視する理由は、共に創り出す空間の中で刺激し合い、お互いに新しい自分に気づく機会を大切にしているためです。

居場所と出会い、化学反応と創発

アウトサイダーアート、エイブルアート、ボーダレスアート、アールブリュット、生の芸術、障がい者芸術……さまざまな呼ばれ方で、障がい者や、専門的な芸術教育を受けない人による芸術作品や芸術行為が名付けられ、それらが徐々に、芸術分野の専門家だけではなく、福祉やまちづくりなどを担う方々にも広く注目されるようになってきました。

画家、ジャン・デュビュッフェによる命名の「アールブリュット」というフランス語が一番早いと思われるので、そこからすでに70年を超えていて、さらに、芸術のジャンルも美術だけではなく、工芸やデザイン、音楽やダンス、演劇とどんどん広がっている現状です。もちろん、とても喜ばしいことですが、まだまだ、検討することも多く残っています。

私も細々とした活動ですが、障がい者とそのヘルパーさん、アーティストや学生たちが集い、時には発表もする「めくるめく紙芝居」というものを10年ほどやってきました。いまになると、一番の機能は、子ども食堂とも繋がりますが、障がい者たちの「居場所」づくりと、市民、学生、芸術家と障がい者との「出会い」づくりだったのだらうと思っています。

ただ、芸術家と障がい者の出会いには、もう一つ、大きな機能——いや、機能というよりも、化学反応という方がいいかも知れませんが——があります。

思いがけないもの、いままでに見たこともないような「未知」を創るという面白い出来事が待っています。「常識に囚われない」と簡単に言っても、実は、それぞれだけで集まると、芸術分野の定式とか、障がい者福祉の定石とかに、どうしても囚われることが多いものです。

こういう思いがけない出会いによる化学反応を、芸術上の「創発 [エマージェンス]」と私は考えていて、生物が生命現象として自ら自己形成的に創発を繰り返しつつ、突然変異を起こして進化するのと同じように、芸術もまた、そういう思いがけない出会いによって、創発が起きるのではないかと考えています。

私たちのまちの片隅のほっこりとした居場所、心地よいのと同時に、見たこともないような芸術、初めて出会う人びととの対話が生まれ

る可能性、それが、障がい者芸術、あるいは、アールブリュットの空間の魅力だと思っています。



京都橘大学教員 小暮 宣雄

高校生が作ったページ

高校生の おサイフ事情

やっぱり気になるお金のハナシ

お店でステキな文具を見かけたらしついつい手が伸びてしまう。部活帰りのアイスはやめられないし、そういうえばあのCD今日発売だっけ……。

欲しい物はたくさんあるし、お金はいくらあっても足りない。ウチのお小遣いはみんなより少ないんじゃない？なんて駄々をこねたり。

面と向かつてはなかなか聞けない、みんなのおサイフ事情を調べてみたいと思い、高校生82人にアンケートを取ってみました。

まずQ1.では、ほとんどの高校生がお小遣いをもらっているのではないかと予想していたので、お小遣いをもらっていない人が19人もいるのは、多いと感じました。

また、Q2.で、お小遣いをもらっている人にその金額を質問したところ、63人が5000円以上と答え、そのうちの57人が月に1回、いわゆる「お小遣い制」という形でもらっていることがわかりました。

Q3.では、アルバイトをしている人が18人で、予想に反し少ないと感じました。その理由としては、アルバイトを原則禁止していたり、許可制をとっている高校が多く、なかなかアルバイトをできない人が多くいることが関係しているのではないのでしょうか。

そして、Q4.で、アルバイトをしている人にその収入を質問したところ、11人が40000円以上という高校生にとって大きな額を稼いでいました。アルバイトをしている人のほとんどが多くの収入を得ているということがわかりました。



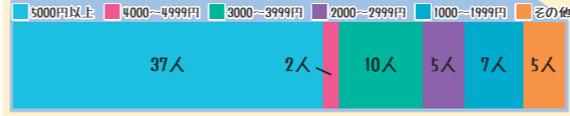
お小遣いをもらっているか、小学生(10人)・中学生(55人)・大学生(63人)にも聞いてみました！

【収入編】

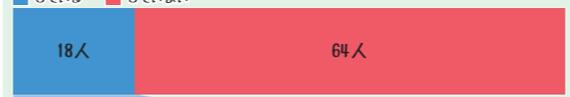
Q1. お小遣いをもらっている？



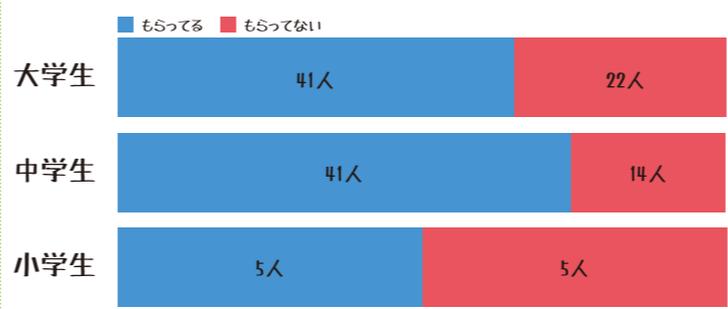
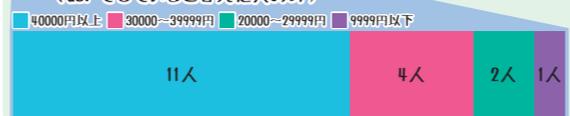
Q2. 1回に貰うお小遣いの金額はいくら？ (Q1.でもらっていると答えたひとのみ)



Q3. アルバイトをしている？



Q4. アルバイトの収入はいくら？ (Q3.でしていると答えた人のみ)



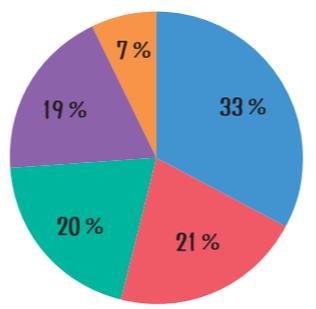
【支出編】

支出について触れてみましょう。高校生になると中学生の頃に比べて使う金額が増えるイメージがあり、さらにアルバイトも出来るようになるため、手にするお金が一気に大きくなる人もいるでしょう。中学生の頃と環境が大きく変わった中で高校生は一体何にお金を使っているのでしょうか。アンケートの結果を見てみるとアルバイトをしている人もしていない人も手にしたお金の大半を娯楽に使う人がほとんどでした。なかでも特に多かった使道は「買い食い」でした。

下校中に友達とコンビニに寄り道したり、時には部活動の遠征や旅行先の駅中商店街でついつい買ってしまったり、皆さんにも心当たりがあるかもしれませんね。また収入のいくらかを貯金にあてている人や、自身の生活費や定期代、そして携帯電話の料金など生活に必要なお金を捻出している人も少なからずいました。この結果は「高校生も自立していかなければならぬのかもしれない」と思われる結果で衝撃を受けました。

「あなたは何のために貯金をしていますか？」

「支出編」で収入の大半を自身の娯楽に使っている人が多いことがわかりましたが、それは誰もお金を貯金していないということではありません。ほとんどの人が収入のいくらかを貯金していました。貯金の用途は人それぞれですが、「欲しい物を購入するため」「将来(進学など)のため」「趣味のため」といった用途があるなかでこれらと同じくらい多い回答が「特に考えてない」という回答でした。私たちの中では貯金は具体的な目標や目的を持つものだと考えていたので、貯金の目標や目的が曖昧な人が多いという結果は少し意外でした。

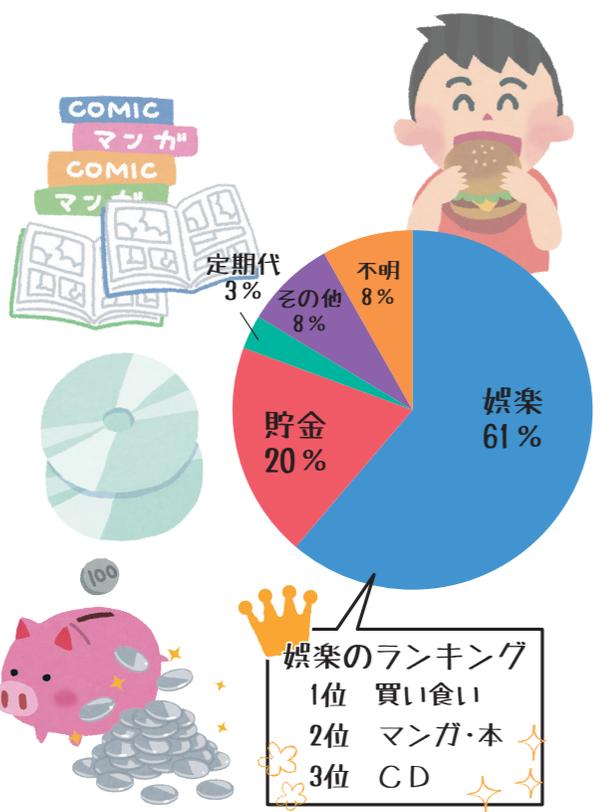


まとめ

今回はおサイフ事情について、高校生だけではなく小中学生や大学生の人などにも非常に多くの回答をいただきました。

お小遣いを毎月もらっている人や、高校生になって自分でやりくりし始めた人、趣味に全財産をつぎ込む人がいる傍ら、堅実に貯金をする人もいて、回答は多岐にわたりました。お金をどう手にするかは人それぞれですが、ひとりひとりがどうすればより良い生活を送れるかを考え、使い道を選んでいるようです。

社会で生きていく限り、お金とは一生の付き合いになります。社会に出るその時に備え、お金の上手な使い方を学んでおくのも良いのではないのでしょうか。



若者の参加とユースワーク

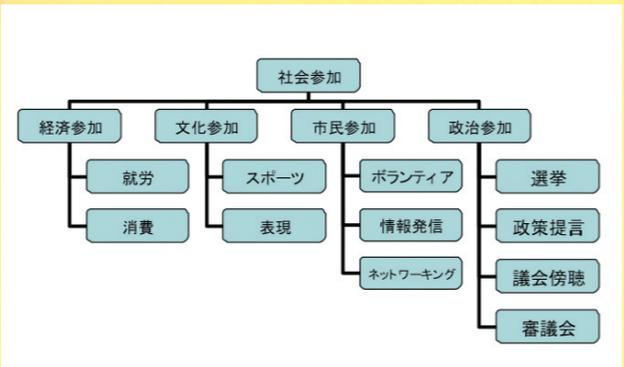
京都市ユースサービス協会・事業部長 水野篤夫

1. 参加は若者の権利

ユースワークの大事にしている価値観の一つに、若者の「社会」参加を進めるといふことがありません。それは、なぜ大事なのか、そしてその具体的な展開はどのようにされるのか、協会の活動経験を紹介しながら考えたいと思います。

子どもや若者の参加という時、最初に取り上げなければならぬのは、子どもの権利条約です。何せ国内法より優先する効力を持っているからです。この条約では、子どもの参加権を意見表明権、意

○子どもの権利条約から
 <第12条>
 第1項 締約国は、自己の意見を形成する能力のある児童がその児童に影響を及ぼすすべての事項について自由に自己の意見を表明する権利を確保する。この場合において、児童の意見は、その児童の年齢及び成熟度に従って相応に考慮されるものとする。
 第2項 このため、児童は、特に、自己に影響を及ぼすあらゆる司法上及び行政上の手続において、国内法の手続規則に合致する方法により直接に又は代理人若しくは適当な団体を通じて聴取される機会を与えられる。
 <第13条>
 第1項 児童は、表現の自由についての権利を有する。この権利には、口頭、手書き若しくは印刷、芸術の形態又は自ら選択する他の方法により、国境とのかかわりなく、あらゆる種類の情報及び考えを求め、受け及び伝える自由を含む。



同時にあまり取り組まれてこなかった政治参加のプログラムを試行していこうと考えました。その取組の一つとして「選挙ドキドキ初体験プロジェクト」というものがあります。これから選挙権を持つ年代の若者に、政治参加の意味や、投票の際に知っておいてほしいことを伝えて、積極的に権利を生かしてもらおう、という試みでした。いろいろな試行錯誤の中で、一つおもしろいアイデアが生まれました。政党や政治家が発表するマニフェストを逆手に取る形で、立候補者に市民（若者）の側がマニフェストを提案して、そのどの部分について実行を約束する

見を「聴取」される機会保障、表現の自由についての権利という形で規定しています。しかし、政府自身がその理念の実現について極めて消極的でもあり、行政施策や教育行政にその考えが広く反映されているとはいえない現実があります。

とはいえ、自治体レベルでは、（地域）社会の担い手としての期待、将来の社会の担い手（働き手・税負担者）としての期待があり、若者の「市民参加」を進めることに積極的なところもあります。京都市もその一つです。しかし、それでも若者が社会を構成する組織や営みに正式メンバーとして参加することに十分な権利条約に掲げられたような点が十分に実現されているとはいえないでしょう。

ユースサービス協会でも、若者の参加・参画を進めることに力を入れて、さまざま取り組みできたのですが、そうした取り組みを紹介しつつ、これから出来たら良い仕組みや取り組みについて考えたいと思います。

のか、公表された「約束一覧」を投票の際の判断材料の一つにしてもらおう、という取り組みです。これは、京都市長選挙で実行に移され、全立候補者に「逆マニフェスト」を提示して回答をもらいました。

その後も継続して、非活発な若者層をターゲットとして、青少年活動センターのロビーで参加を仕掛けるプログラムを実施したり、センターそのものの運営に若者の参画を進めたりと、さまざまな取り組みを継続して来ています。

3. 若者が参加するための基盤

そもそも、ユースワークはなぜ若者の参加を求めるのか？ ユースワークの目標観を表すと次のような言い方になるといえます。

「ユースワークは若者の個人的、社会的発達を追求するとともに、彼／彼女らがコミュニティや社会全体に影響を与える形で発言していくことを可能にすることを目指す。」

コミュニティの一員になっていく地域参加ということ、企画委員会が整理した社会参加の分類では書かれていませんが、実は若者の参加の目標そのものが地域参

2. 協会の市民参加促進の試み

ユースサービス協会として、若者の市民参加に具体的に取り組み始めたのは、2000年頃になります。ちょうど京都市が10年間の基本計画を改定する時で、若者からの意見を出して欲しいと市の担当者から依頼があったことにも後押しされ、若者のチームを作って、市に対してパブリックコメントの形で多くの提案を投げかけました。その取り組みは、次の青少年育成計画への意見提案につながり、2003年にはWACCORD（わこーど）という「青少年市政参加検討プロジェクト」に繋がっていきます*1。WACCORDは半年あまりの議論を経て3つの提案を行うとともに、自身がその具体化のための実行チームとなりました。

- (1) 審議会の公募委員をバックアップしながら、若者の意見を反映するための若者組織を作る。
- (2) 若者に届く広報デザイン・コピーを手がけるグループ

加だから書かれなかったともいえます。つまり、多様な形の参加を切り口としながら若者の地域参加は可能になるし、それが出来て初めて若者は大人社会の一員となりうる（それが「大人になる」こと）からこそ、ユースワークにとって、若者の参加を進めることは重要なのだといえます。

これまでの取り組みをふりかえって、やはり若者の参加を確かなものにするには、恒常的な組織基盤が必要なのだと思うようになりました。そこで参考になるのはやはり海外の事例ですが、中でもユース・カウンスル（若者協議会／若者委員会）という実践が目目されます。一定の条件で集まった若者が、行政・政治において、特に若者に関わる事柄に対して発言権・決定権を持つことができる、公的な組織を作るといえるものです。そこで集まり、学びつつ地域社会の構成員として参加していく

- 立ち上げ。
- (3) 子どもの頃からの地域参加経験の場づくりを進める。

WACCORDの活動は、その後5年あまり続いたのですが、メンバーの世代交代にもなつて活動を休止していきまふ。それに続いて協会の理事会を補佐する企画委員会という組織で、若者の市民参加のあり方が議論されました。委員会では、2007年3月に以下のような点を報告します。まず、若者へのアンケート・インタビューから、参加についての意識を確かめ、それが無関心層から、社会参加している層やリーダーとして周りを巻き込んでいる層まで分かれるのではないかと分析しました*2。この分析はその後の取り組みにも反映されていきます。そして「参加」ということを幅広くとらえて、トータルに参加を進めることが課題だと提案しました（図参照）。

協会では、この提案を受けて、これまであまり活発に「参加」をしていない層をターゲットとし、力を身につけていくことができ、そんな組織が必要だと思えます。「若者に責任を持たせて大丈夫なのか？」という意見がありますが、2000年のプロジェクトに参加した高校生の一人はこんなことを言っています。

「……責任を問うなら、それを学ぶプロセスを保障してほしい。（そして）もっと任せてほしい。任せて出来なかつたらどうなる？ と試されるけどそれでもいい。」

京都でも若者の声が反映される、そんな組織作りを目指していきたいと思えます。

*1 市の審議会の傍聴、市民活動グループへのインタビューや若者へのアンケート調査などを通して、提案をまとめて市青少年活動推進会議に提出（10月）した。メンバーは約20人（高校生・大学生・専門学校生・社会人）。

*2 1群…無関心層（一番手強い？） 2群…何か始めてみたい。知ってみたい。出合いを求めている層。 3群…あきらめていない層（一度、政治に関心を持ったけれど失望した層） 4群…社会参加している層（ボランティア活動など自分の団体の活動で満足している層） 5群…政治参加している層 6群…リーダーとして周りを巻き込んでいる層。1群が圧倒的に多く、6群に近づく程、人数が少なくなる傾向があると考えられる。



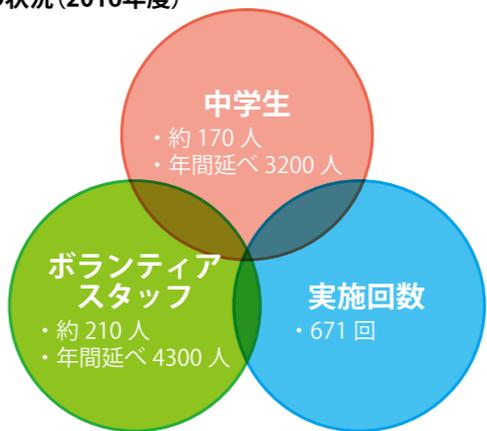
コピー企画
 「初めての選挙どうだった？」

学習支援事業とは

京都市ユースサービス協会では、様々な事情で学習環境の整いにくい状態にある中学生らを対象として、高校への進学を手助けする学習支援事業を2010年から行っています。2006年より

ケースワーカーの自主的な活動として始まった取り組みが事業化され、2017年には市内すべての区で学習支援事業を展開し、それぞれの地域の状況に合わせて運営を工夫しながら実施しています。

運営の状況(2016年度)



活動の実際

学習会は、週に1回、1時間半〜2時間半、1対1での学習支援をベースに、大学生を中心とするボランティアスタッフが中学生の希望や思いを聞き取りながら一緒に勉強しています。勉強以外にも、交流イベントで中学生同士やボランティアスタッフとの仲を深める機会もつくっています。

みえてきた成果

学習面での成果としては、継続的に参加をして

られる経験が中学生にとって大きな意味をもつのです。

同時に、ボランティアスタッフにとっても社会課題を身近に捉え、同じ学習会の仲間と共に考え、「他者の役に立つ」という経験は大きな意味をもちます。中学生にとっては身近な「大人」であるボランティアスタッフもまた、成長過程にいる青少年です。活動を通して他者と関わる機会を得ることは、彼らにとっても社会とつながり、成長する重要な機会となっています。

花園大学研究チームから

こうした成果については、花園大学子どもの貧困研究会による「京都市学習支援事業調査報告」でも明らかにされています。この調査は、京都市ユースサービス協会が実施する学習支援事業の参加者・ボランティアスタッフ・ケースワーカーに対してアンケートを実施し、その結果をまとめたものです。調査報告の中では、中学生が安心できる相手と話すことで学習会を安心できる居場所と感じ、そういった居場所こそ自己肯定感が高まり、学習支援の成果を生み出していくことが報告されています。ただ勉強を教えるだけでなく、身近な大人と関わり、自分を肯定的に捉える経験をすることで学習支援の成果が生まれると裏付けされています。

今後の展開

学習会に参加している中学生は経済的な困難の問題に限らず、親が遅くまで働いていて家での学習習慣が整っていない、外国にルーツがあり学習言語に困難があるなど、異なっ

意欲をとりもどした中学生

勉強への苦手意識が強かった中学生のBさんは、問題に向き合うことが難しく「わからへんし嫌、やりたくない」と諦めの言葉をよく口にしていました。学校や家庭では、そのような態度について叱責されることが多く、一層意欲をなくしている状態でした。学習会ではBさんに寄り添うことを決め、決して叱ることなく「一人では難しいね、一緒にやってみよう」と声をかけ、「やればできる」経験を重ね、Bさん自身が「やってみよう」と思えるように働きかけを続けました。学習会で成功体験を重ねるうちに、次第にBさんは意欲的に学習に取り組めるようになりました。



スタッフ研修の様子

いる中学生の基礎的な学力の向上がみられました。学力に「遅れ」のある中学生もいましたが、1対1の体制をとってボランティアスタッフが継続的に関わることで

現在、市内全ての区に1つは拠点が有り、数としては拡大・充実がはかられています。今後は、これまでの運営の中で見えてきた諸課題に向き合い、中身を充実させていくことが求められます。欠席の多い中学生や外へ出にくい中学生への対応や、高校進学後のフォローアップも検討が必要かもしれません。または、学習支援以外にも生活環境や家庭環境を包括的に支援する仕組みづくりが求められているかもしれません。全拠点で話し合い知恵を出し合いながら、中学生のことを大切に思う大人のネットワークを広げコミュニケーションの持つ力が発揮される場づくりができればと思います。

個々の状況を把握することができ、それぞれに必要な学習を組み立てることができました。

はじめは学習に取り組むことが難しかった中学生も、「わかる」という感覚が自信になり、学習への意欲向上につながりました。テストの点数や通知表の評定など、目に見える成果を見せてくれた中学生もいれば、意欲や集中力や態度など、その姿勢に成果を表した中学生もいました。

一定の関係性を築いたボランティアスタッフと学習を行うからこそ、細やかな気づきが活かせるのだと実感しています。

また、中学生とボランティアスタッフが良好な関係を築くことで、中学生にとって学習会が「飾らずにいられる場所」「安心していられる場所」になっています。信頼できるボランティアスタッフに見守られる安心感や、保護者や先生とは違った身近な大人に褒め

ユースかわら版

カンボジアスタディツアー 2017

伏見青少年活動センターでは、8月5日(土)～10日(木)の5泊6日で、認定NPO法人テラ・ルネッサンスと共催し「カンボジアスタディツアー2017」を実施しました。10～60代まで幅広い属性の7名が参加した今回のツアーでは、戦争の負の遺産である地雷の撤去現場見学や、村落開発支援現場・孤児院の訪問、アンコールワット観光等、カンボジアの光と影に触れました。子どもが人懐っこく、大人も皆親切で優しいカンボジアに、参加者全員魅了されました。

ツアーは終わりましたが、この現実を知った上で「私たちに何が出来るのか？」を帰国後の今問われています。現役教員の参加者は、実際に、自身の学校で平和学習を展開しています。センターでもツアーを受けて、下記日程で7人それぞれが見たカンボジアを報告します。ぜひ7人の“気づき”と“想い”を聞きに来てください！



カンボジアスタディツアー 2017 報告会
日時：12月16日(土) 13:30～16:30
場所：伏見青少年活動センター スポーツルームA

シェアハウス×まちづくり NPO法人 聚楽第(じゅらくだい)

京都で大学生、社会人、フリーターも合わせて8人でシェアハウスをしながら、まちづくりに関わっています。今では地域の行事があるごとにお手伝いさせていただいていますが、シェアハウスを始めた当初は地域の方々からの反応があまり良くありませんでした。地域性を大事にする京都というまちに、シェアハウスが果たせる役割はなんだろうか、と考えたのが聚楽第を始めるきっかけです。じっくり関わってみたら、こんなに居心地の良いまちも珍しいと思っています。下京区で発進したばかりですが、地域の方が気軽に立ち寄り未来について語り合えるような「場づくり」にも取り組んでいます。シェアハウスが単なる住居ではなく、地域と共に新しいアイデアを生み出すような新たなコミュニティのカタチになればいいと考えています。僕たちと一緒にまちづくり・場づくりをしませんか？

URL: <https://m.facebook.com/kyoto.jurakudai/>



ユースシンポジウム 2017「あなたと考える、これからのオトナ～大人の条件ってなんですか～」

「大人って何？」を参加者同士で語り合い、若者視点で現代の「大人観」について問い直すシンポジウムを開催します。

『響け！ユーフォニアム』原作者・武田綾乃さんによる基調講演と、参加者が自身の大人観を考える分科会を通して、若者の今について考えます。

日時：12月17日(日)
13:00～17:00
場所：下京青少年活動センター



ひろい～な×ふらっとb合同鴨川清掃

南青少年活動センターでは、9月30日(土)に清掃活動ボランティア「ひろい～な」のみんなが鴨川清掃を行いました。普段は月1回センター周辺の清掃を行っている「ひろい～な」ですが、この日は特別出張清掃。何カ月も前から計画を立ててこの日に挑みました。

「ボランティア体験事業ふらっとb」から当日ボランティアも受け入れ、計10人で七条～三条間のゴミを拾い歩きました。限られた時間で泣く泣く拾えなかったゴミもありましたが、活動を終えた後、「楽しかった」「初めて会う人ばかりだったけどすぐに打ち解けることができた」という感想をもらいました。



アートであそぼう ぷれい、ひがしやま

東山青少年活動センターでは、トリコ・Aプロデュースの企画運営のもと、若い親世代を対象にした親子プログラムを毎月1回実施しています。親子参加型のお芝居や造形遊びを手法に、楽しいふれあいを通して表現力や想像力を大事にした場です。

毎回、舞台俳優や演出家、芸大生グループが遊びの導入部分を作り一緒にふれあいながら遊びます。参加者からは遊びの広がり方を学ぶ機会にもなっていると聞いています。

アートや演劇のプロとふれることで、子どもたちには小さな頃から文化的な体験を積んでもらいたい、子育て中の若者が地域で孤立せず子育てをともに楽しんで交流できる場になれば、と企画者は話しています。また、パパママになりたての親同士や先輩ママさんとの情報交換の機会としても場を使ってもらっています。お気軽にご参加ください。



◎興味深かった内容は？(一部抜粋)

- (特集) やましな 99**
- ・青少年活動センターは関わるのがなかったけど、読んで楽しそうと思った。
 - ・色々な人がいることを考えさせられたから。
- (ユースワーク・ユースサービス) 集団を通じたユースワーク**
- ・グループワークについて改めて理解することができた。
- (高校生ページ) 転売問題を考える**
- ・高校生が作ったという事に魅力を感じた。
 - ・身近な問題だと思う。

- (ユースかわら版)**
- ・たくさんの人の活動を見て参加したいと思った。
 - ・「恋ダンス」商店街をもっと盛り上げてほしい。/地域が一体化している活動でとてもよかった。/流行りに乗っておもしろい。/見てみたいと思った。
 - ・若者のために様々な活動を行っていることが分かった。
- (Topics) 学習支援事業**
- ・中学生の自己肯定感につながる居場所になっていていいと思った。
 - ・自分が知らない所で様々な活動を行っていることがわかった。
 - ・背景がポップで軽く読める印象、グラフィックがカラフルでかわいい。

読者の声
Vol.28



公益財団法人京都市ユースサービス協会 賛助会員「ゆうサポ会員」募集中

京都市ユースサービス協会賛助会員(愛称:ゆうサポ会員)を募集しています。

みなさまの継続的なご支援により、子どもから大人へと時間をかけて成長していく若者を、安定して支える基盤をつくるのが目的です。ご支援のほどよろしくお願いたします。

ぜひ私たちといっしょに京都の若者を支えていきましょう！

発行 公益財団法人 京都市ユースサービス協会
〒604-8147 京都市中京区東洞院通六角下ル御射山町262 京都市中京青少年活動センター内
tel: 075-213-3681 fax: 075-231-1231 E-mail: office@ys-kyoto.org
HP: <http://www.ys-kyoto.org>

印刷・デザイン: 株式会社谷印刷所

